

宿直草卷五

目録

第一 産女うぶめ乃事

第二 戰場せんじやうの伝火でんかり乃事

第三 仁光にこう坊ぼうとらふ火ひ乃事

第四 弟我あにが乃函买はつらい乃事

第五 右弟みぎあにの里さとれゆるまゐり乃事

第六 たらしおそけり一に物ものかろ事

第七 学僧がくそうぬと人の家いへに宿やどる事

第八 乃切なりきり僧そうの戒かいり乃事

宿直草卷五

第九 猿さる僧そう狂くる氣きなる者ものふめい乃事

第十 糸脚いとくり人ひと共とも事

第十一 六音むいん紙しまき乃事

第十二 堪かん無む乃一ひと極ごく乃事

宿直草一巻之五

第一 ぶめ乃事

寛永四年三月廿一日のさるもはく下女乃事
 一 申すはよおし 産女となりて来りしつひに
 の儀にそれあひては来乃戸とて一め産の産を
 おろけりハそのころ後他はありてつりま
 さいをぢれもめ せりさるるにそれものあ
 るまうせたまふとのお花乃八日の後さかあ
 つて一くおろけりさふこそとていを例の者
 とそらぞらなくおろけりとのいさうをよそ
 よそのい急屋あつてさあひとなく二考ま
 であるい個としていさうあつていさう
 つひに申するごとく一考乃うち二考け
 いあひいべいさう急乃あをれさういさう

宿直草一巻之五

あつていさうゆれごら亡契乃おとしハガ
 一いさうせとのいさうのりよおくいさう
 七がねやゆくと七糸の事ありあつていさ
 むらうれをどのがねや乃いさうの産女を
 るいめくをとりつををとりとてやあつて
 日乃ふ血乃つとつらほご切なり産を
 らういさうたつていさうゆきを法を
 てゆくをそらり産を産をいさういさう
 よあつていさういさういさういさういさう
 がさういさういさういさういさういさう
 乃あつていさういさういさういさういさう
 さういさういさういさういさういさう
 うけとつりいさういさういさういさう
 産はゆいさういさういさういさういさう

もまうこあまり

第二戰場乃徳火りゆる事

寛永十一年夷賊二日ふらうは乃こまふゆきつ
ぶらるれ九月よまごまんとて書つても
田久人はまていでくろぐ槍の舞風も秋を
くるとかろしくもそを死ぐえよのそろほらも
しよ一交乃まらりあひとまのうごれも
はまらるこのまもまらんあまらとガ
むらりなごりよるはあをとおあま
ゆぬみらふまらるまらあぬり病あ
るまらそらう田南よらまら十
まらまら耀く耀くして火も出ら
まら尺まらりまらいほをつまら
まら月まらまらまらまらまら

宿直草卷五

元和乃軍の二日ふらうは乃こまふゆきつ
おろくあふ死とそを死乃とそまら
アまらりえまらまらまらまら
あら乃まら火まらまらまらまら
おろくんとあまらまらまらまら
くまらまらまらまらまらまら
あまらまらまらまらまらまら
火もまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまら
らまらまらまらまらまらまら
てまらまらまらまらまらまら
おろくまらまらまらまらまら



乃んばともしとわづめとともてにうりーありまのあは
 つらうらまへんゆりま

第三 仁光坊との火の事

此の頃下船は仁光坊との火あり而も船は疾
 とひめぐりやもともんじんゆきあき恐怖を
 あひり人よこしは廣なるかうりさかともさ
 了獲りよりそはまこも荒れんゆ火は増減あり
 おほさハまりれどなりともんじんやうき疾風乃
 こも火は廣ありて三回火ひりわりおりてあは
 あよとこハ坊主れびと息をたびは火端出
 ぶとまりいりる始末としりハその船は海に
 邑ありぞれ國乃尹令一終ハ俗と名ありあひく
 海にのこのふ地は好くめてとく富ま
 りとも中右乃事としりや世がうりともれり

あり仁光坊いそそくいどわろ行禱法師ありぞへま
とこもたとしつとくすこ賢僧あり意が眉宇も
とろとろいさふたれがたのよ衣紋とほくろひこれ
がよよ賢僧とるいふ人そをもつて神をもよふれ
どもし僧不犯うして威儀多しくあこさふ一日
海くおどわ肉より色あうと信よ小善ととて文
ほくひ終つよざりあきしせでく人をとすはせうそこ
とてあつあまりふぼさうりされびひうとそしあふ
君ゆへう 思ひうたれ たひらうも さそくも花と
さうれやま ぶあくゆふ さうさうや かさうなうとふ
ひとりわて ぢひひつて ひらさうれ 池のさうつよ
力をもちて 忍ん今もたれ 秋乃費の つまあひまひ
お井井川 糸をねまは あ〜山 たままりはの
ねとのふ おふひさ あうさうら ひらりあ〜あ

有直堂 米三

五

ゆりあやま ちふふ勢も
いそおれも ちがあもも
あ〜つらう みはぬは
申あえて 意〜んよ
まうねまは 物うと様と
されら〜や 人さまわかれ
とらまはれ ともあひは
みられくの ちあぶら摺
せさちまで ちまひひて
ちさう〜ん ちさうい別と
あうまでと ちとほほ乃
あ〜まびて ちけく渡ハ
あつもるな さうれ中山
みういかな ちあひらと

ちらせやま ちらせやま
ほろ〜乃 ちらせやま
さうれあ〜 ちらせやま
あ〜さうや ちらせやま
ちがれ〜 ちらせやま
やまあ〜 ちらせやま
あ〜ひひも ちらせやま
あれゆ〜 ちらせやま
こ〜ひひも ちらせやま
さう〜さう ちらせやま
さよち〜 ちらせやま
おほ〜川 ちらせやま
あ〜く〜 ちらせやま
ちけてたふ ちらせやま
ちら〜ら〜 ちらせやま



宿直草卷五

乃のこゝきつひきらんとていへりくあやうくあひまを
あつねのとはふ海挽^{うみづな}どのふくふりく。さて又仁光
扇^{あふ}もそむくゆ^ゆにふありうーあき。勢^{せう}去^きびくさる
ふいふあきまーくをゆねもふさういひ結と
いふおれをゆへさてくさやう乃事うとていもれ
介もゆてさう。あういふさるなり。あうとさうめは
あそあきまーく。やうて下^{した}筋とて聖系よ引
とへ着らるんふふあういふたれ僧大さふりゆ
る兒中よ命さうり事よ内乃さうかこい徳さう
浦^{うら}。あうもるひ結てうーは結さて冷下の
まう勢^{せう}織ちまふさういひ。あういふむらひう。勢^{せう}裏乃
はささうり勢^{せう}去^きふもゆねさかたうりのまう。ま
て殿もやせ家さうまあや中りる兒とばまひ
あうて悔^{くわい}も結^{むす}ふ身^みはあけり力さうかなく今の一合



宿直草卷五

ぬいとどびつゝ。あゝその何よむさし〜なれど〜
 くちまごまごもせせぞれつ〜ふん〜
 さうのころ世乃宿乃まごぞんえん〜せさ〜
 ぞや若れ枕の〜も縁あま〜
 えんもまれあ〜い〜ひ〜
 あく〜のちま〜
 乃城（おしろい）ふむ〜
 けり〜
 一ふけ人も〜
 思ひ〜
 ころの〜
 なる〜
 ひとり〜



うらふおの乃書しほのつなりきくのそめハ生約巻
 銀りり山をむじういそくねねを金巻を神巻山を
 巻ふ山丸巻乃くは巻よこそくわくわく牧場の
 巻もたつたかま川風さうんとまびみまえ乃巻乃
 巻よハ約巻乃多くくり火もさうこくわく巻乃
 じまゐる巻ハ漁父漁人の巻よりいよおろくゆふ日
 てる巻乃紅巻さうくられ巻乃さうてくさ
 乃巻のあーとあやしく天巻神のりり乃巻を
 ぐれさうくもあけがのよ巻うま巻乃巻乃巻乃巻乃
 ほこの神みら巻いそく巻巻乃こく巻の月ハ巻客
 も巻乃くあーいと巻巻まん巻巻たたくゆまありえ
 巻うこ人のむじ巻うー巻川のあさ乃巻いさ
 ても巻巻の巻とうく巻巻巻巻がう巻巻巻巻巻巻
 さをかそのすさ人巻うー巻巻その巻十巻百巻乃巻



ともづやうの月よりよの池かて鏡をほろとぎん
 乃ら後こいなるびあこのむらさねさるたたりたこりとのふ
 ちなるむとらげつきてたれをまけにるあもさ一尺
 ちり乃かをるびうれ松乃水ぎ一なるあまりよふ
 えがれあり一は浦さいつさなを二三尺あふつきて
 あわらきてていれから物れとらるんぞたこれも
 ひとけうらうらやとさるたようちうをくついのて
 まるさるくもひくをびいませうへくとひく
 たりび乃ちうらふさしもの松ゆつたさるまうらあふ
 てひくがごとし船中うらうらのいよるあもしても下
 ようくあてあつらるるさごとしつりよ池乃運は
 さやまのひ一妻か梅のうらりをねさるまも小海平
 へ入あつらつりかあまらハ松をらうさつらせしり
 池はあまあがりびやとをたのこほて果ぬとらるり

第七字借ぬまの人の事

其の事乃ちめ初めの借字びのため冥途へくはる。檀
中より饑乏して灰吹三百目とする。筆跡せれる付
時代されど屬し乃事なり。平のつこよ入らなく
と志すれらよ。一は宿をきりて白くれば。よ
少後またとんもことしとみせし。ふよあるを
とる。や。こ。ん。と。ふ。や。と。く。と。う。は。う。れ
く。く。外。さ。あ。る。ト。物。さ。り。ぐ。よ。て。あ。ま。る。鬼
つる。れ。れ。男。二。三。人。と。密。の。後。合。の。さ。後。借。を。こ
ろ。と。ん。こ。よ。や。め。く。れ。あ。る。も。あ。る。ま。も。小。判。と。る。あ
り。て。あ。一。そ。の。の。れ。く。く。人。物。う。と。も。ふ。後。く
一。み。つ。の。時。廻。り。と。ふ。あ。る。い。と。一。富。よ。ゆ。く
と。や。う。ま。り。く。れ。を。持。来。の。う。ろ。う。よ。う。と。わ。ら。ん。れ
あ。る。い。と。れ。また。ち。あ。ま。く。松。の。り。と。さ。る。迹。と。も。迹

宿草草五

十一

はうきんと思ひ。さ。が。り。と。あ。ま。の。ま。ま。の。の。かり。あ
か。あ。く。よ。お。も。人。ら。ち。も。さ。れ。ま。よ。う。づ。く。つ。り。め
ん。と。く。さ。る。ん。と。物。と。ひ。り。く。よ。一。人。か。り。や。う
う。さん。あ。る。本。後。多。く。後。と。く。は。と。そ。忍。よ。ま。ま。同。し
さ。の。の。い。で。い。山。と。て。迹。え。ん。と。う。あ。く。も。下。知。と。む
と。く。と。や。火。う。り。あ。る。は。く。借。れ。多。の。一。本。大
く。さ。る。も。さ。る。う。ら。れ。ば。生。さ。る。う。ら。ら。く。て。あ。あ。う
こ。こ。な。つ。と。一。人。か。り。や。う。は。と。あ。て。し。と。借
み。く。あ。い。ひ。と。一。人。も。あ。う。う。と。知。ら。ふ。さ。ら。ん。て
半。に。ま。ら。ふ。態。本。と。う。う。さ。あ。り。て。く。れ。後。の。し
男。も。も。ん。よ。ひ。さ。ら。の。の。う。も。の。か。さ。て。や。は。態。あ。る。は
と。う。か。し。と。あ。ま。さ。ら。れ。と。迹。ゆ。く。借。ぬ。ま。人
の。難。の。の。れ。う。も。又。態。の。つ。り。は。あ。ま。ら。う。と。さ。い
や。ま。て。息。は。く。さ。ら。ら。と。あ。ま。ら。う。と。い。は。う。て



百五十五卷五

さうりしよやまこ熊ハりの縁らふふる。暖
 かりてみ熊乃ねきんとありふ後まらういそ
 うふかり。沛公項羽の困とのがれ物大場がせのよほ
 ぬえり。あちちとて終は楹柱よ字ひてまこ洛陽
 一のわりし僧垂よはませしとてまほえはくを
 のころゆり

第八道山緋山緋の事

あまひりしよの縣さるもの伴僧三四里ある山家
 一ゆらぐとさるるまそあむじり蹄あしう人迹
 多したる様道よあまねるるあまかひりふまをこ
 いうまらまらとらゆゆは山緋猿人そらゆ
 ぶ裳まを牧笛とりてそまらちらのんとまらに
 けあふ流へるまらづうまのあそろあまらたえ
 らひあふ山緋みまら流つておまららとらふ



宿屋 巻五

二二二

おそれ 事なすりゆり

第十 京師より人共来す

柳司代 多賀宮ありしとよりよきさねらめせし人
 あり。このとよき京分限ある町人の子ありて
 たり。十人よひたりてそのいさ。親うきひ
 あひてあれは所ふ。柳司代よりふ思ひある
 共一人あも町人のより。ば。小孫めらり給ふり
 かしらもろきもあつまる小孫。給てせ七八乃女房
 神のうけりきえさるるぬまてよほのめく。あ條
 あたりたひひりゆ。よあおねをい。て。あ。り。よ
 い。い。え。う。と。と。り。給。ふ。と。り。ま。わ。こ。こ。京。あ。り。へ。ま。の。り
 と。の。よ。ど。ら。り。ま。の。り。ま。ま。ま。と。あ。れ。は。づ。の。情。よ
 ほ。こ。ら。り。や。と。の。い。神。敬。ま。て。よ。ま。ま。が。ん。を。是
 ら。こ。も。あ。や。乃。の。の。さ。れ。と。あ。り。い。女。を。う。と。さ。ね。お

たきもとさりくそせゆを流るるはけよあひと
ことの察乃くもせしむくかこられをゆくをさ
三条につをさりまうらぐすとうはあれりしと
うらさくたされぬ固りあり振るる女三人
たちあてさくくさり流るるまうらまき
とまをとりまけ入流るるのふりやこれせあり
とあれど先とせしむるを固りんとおほく
入たまうらまきくせつありくりてを流るる
くつ流るる流るるに例乃女らう勢を勢ゆる
とあれまきあさせ流るるを又みらさるるも流
るるねせつひりせしとまはまきくくゆるた
あさく人乃枕よりせんくさたまへと流るる
やふりよお目代をふりさりありこのあさ
ささりりたれがさひは乃流るるの流るる

まきくさあさくさこよひのゆをさるるは
はくちあけまきくして流るるはさるるであり
まきくさるるはあさく流るるへくんとてた
ゆらまきとねんさるるはまきくさるるは
流るる女をさるるをさるるはまきくさるる
いあや乃あさりして精をよひ付そのあさ
目くは家國にありは女七八人男十人をさるる
とらあ内よ井戸ほりまきくありて戸
とさるるはまきくさるるはまきくさるる
うせにほりまきくさるるはまきくさるる
まきくさるるはまきくさるるはまきくさるる

第十一又歌流るるまきく

あつ俗毒膏うさひうらうらまきくは敵者ま
てまきくは流るるのあさくまきくはまきく

さぶんもあ〜〜いをさのい〜い〜い
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
命のよきとあ〜い〜い〜い〜い〜い
をまらぬととり替れと〜い〜い〜い
見つゝもく沈〜い〜い〜い〜い〜い
の〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
ア〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
ら〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
つ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
書〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
かりより〜い〜い〜い〜い〜い
かその中よ人のい〜い〜い〜い〜い
書〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

に〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
撰めらぬよ〜い〜い〜い〜い〜い
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
これ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

卷十二のん〜い〜い〜い〜い〜い

天満の商人あり推〜い〜い〜い〜い〜い
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
か〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
ら〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
素〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
え〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

おられさうしなれ七八歳よりみすまは
十五歳の若き時あはれと書さうとあはれ
おこがましうくこをゆねうや人のつらりそ
あまうこをそのつらりまれおあまうさるり
人まごころはあま福

延寶己厩初去吉旦

五条橋通扇屋町丁子屋

西村九郎右衛門開板

延寶五年八月

二十

延寶五年八月

八
十